国家の輪郭と越境
第一回研究会『Mother India』を読む　報告書

日時：平成 21 年 4 月 28 日 15～17 時
場所：大阪大学箕面キャンパス総合研究棟 6 階「国家の輪郭と越境」プロジェクトルーム
参加者：5 名
テキスト：『Mother India』(Part I pp.3-62)
　　Katherine Mayo, 1927, Blue Ribbon Books, New York
担当者：小松久恵　大阪大学（第 5 班プロジェクト研究員）

最初に担当者から「地域大国」としてのインド、中国、ロシアがこれまでいかに描かれてきたのか、様々な資料を精読して広く検証する、という本研究会の目的が説明された。続いて今般取り上げるテキストの概要が紹介された。

1927 年に『Mother India』が出版されると、国内外を問わず大きな話題となり、インドの後進性を指摘したその内容を巡って激しい議論が巻き起こった。何度も版が重ねられ、出版後の数年間は毎月の増版が記録されている。著者であるメイヨーは、「インドの公衆衛生の現状を調査するために一個人として私費で視察に赴いた」と主張しているが、その主張が事実に反していることが近年の研究で指摘されている。

インドの後進性を指摘し、イギリスによる統治の正当性を裏付けるために作成された、とされる同書において、メイヨーはインドならびにインド人をどのように描写しているのか。現代にいたるまで頻繁に引用、言及される同書ではあるが、それらの先行研究に惑わされずテキストを丁寧に読み進めていくことが研究会の目標である。担当者は詳細なレジュメを作成、配布し、そのレジュメを補足する形で会が進められた。

Part I の前半ではメイヨーがこの視察旅行でどこに行き、誰と会い、何を見たのかが記述されている。しかし参加者からの指摘にもあったように、それぞれの場所でどのくらいインド社会と密接に関わったのか、どのくらいの期間各地に滞在したのか、またどのくらいの規模の一行で動いていたのか、具体的な数字があげられていない。例えば彼女はどこに宿泊し、何を食べ、どのような手段で移動し、誰の案内および通訳でそれぞれの場所にたどり着いたのか。メイヨーはどこにも所属せず、後ろ盾を持たず、個人で視察を行ったと主張する。しかし参加者のほとんどが現代インドでの調査経験を持っているため、各々の経験と比較しつつ 1920 年代のインドで外国人女性が単独で調査を行うという可能性に関して、疑問の声がいくつも上がった。

後半部分からインド社会の後進性批判が始まるが、メイヨーがどのくらいの観察期間ならびに事例数を経てその結論――例えば農村部では非識字が「好まれる」、医学的に観察したすべての幼児の身体には性に耽溺している傾向が見られる、インド中で魅力的な少年は売春夫として寺院を定期的に訪れ、両親は息子の人気を褒めそやす等――に至ったのか、刺激的な描写の連続に、読者には立ち止まって疑問視する猶予が与られない。Part I 全体を通して、メイヨーが繰り返し主

張するのは、インド人が性的に過多でその悪影響が心身ともに及んでいるということである。その例として、メイヨーは幼児婚と幼年での性行為、妊娠を挙げる。特に Part I の最後の章では、彼女が婦人科、産科で実際に見聞きした 10 代前半の患者――無理な性交、出産の被害者――の様子が生々しく描写されており、国内外の読者に非常に大きなショックを与えたであろうことが予想される。

参加者の一人からは、1920 年代のインド国内における家族計画運動の状況が説明され、またメイヨーと同時代の著名な活動家、マーガレット・サンガーとの関連性をさぐる声も上がった。また、メイヨーはしきりに「性的過多なインド人」を糾弾するが、そういったイメージは当時すでに西洋諸国で流布していたのか。していたとすれば、どのように形成されたのか等、今後の課題としたい。また担当者からは、当時のインド社会における性をめぐる意識に関する参考資料として *Sexuality, Obscenity, Community; women, Muslims, and the Hindu public in colonial India* (Charu Gupta, 2001)が提示された。

なお、今回の研究会の参加者は直前の案内にもかかわらず、本プロジェクト関係者 1 名の他、大阪大学非常勤講師を含めた美術史、人類学等さまざまな研究分野の若手研究者が集まり、互いの刺激を得た点でも非常に有益であった。

最後に今後の計画を話し合い、第二回目と三回目の予定ならびに担当者を決定した。

今後の予定は以下の通り
第二回研究会：5 月 12 日 15 時～17 時（Pat II） 於大阪大学箕面キャンパス
第三回研究会：5 月 19 日 15 時～17 時（Part III） 於大阪大学箕面キャンパス